
DEAR...

サビバケツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEAR . . .

【Zマーク】

Z2358B

【作者名】

サビバケツ

【あらすじ】

【同じ事を同じようにして何が楽しいの?】と、問い合わせはやがて虚めの対象となり、彼女に降り注いだ。錯乱状態に追い詰められた彼女は【信用できるモノ】と出会つ。

ねえ、この世には
綺麗なものばかりなんだね

薄汚いヌイグルミは
すぐ見つかって捨てられてしまうの

知ってる
分かつてるから
孤独でいることと
孤独になることと
分かつてるから

もう私に
かまわないで

¢

何故人は同じものを同じように、繰り返し繰り返すのだろう。
誰かが横に振り向けば皆振り向くし
誰かが笑い出せば皆も笑い出す。
何故同じものであろうとするのだろう。

違う人間なのに。

せせら笑いの声。

まわされてきた手紙。
複数の人々に書かれた、滑稽な文。

【シネ【ブス!】馬鹿【にきび】ふけ!【テブ】もつ来るな!】

ああ、いつの間にか私は対象になっていたんだ。

実に下らない。実に馬鹿馬鹿しい。

私はソレをびりびりにちぎってごみ箱に捨てた。

「ねえ、 笹井さん、 最近どうかしたの？」

ウエーブのかかつたボブの髪が揺らぐ。

同情でしかない眼。正直話しかけないで欲しい。

きっと心情はこうだ、【どうせ、子供の虐めなんて過ぎ去りし事】。

それでも、もし、変わらなければ、幼い心は思ってしまったのだろう。

「こじめられてるんですね。ソレが何か？」

先生は悲しそうな顔をした。

「そんな事いわないで。

ほり、どーんって机くつつかいで仲良くなっちゃうよ」

それができたら。

今の私はいないでしょ「つへ先生。

もう絶対、一生、先生を信用する気になんてなれなかつた。

部活の先輩は私を私と見てくれた。

「もしもこの世に信じられるものがいたら良いのに。」

「こらだら? ひとりぐら?」別にその辺の猫とかでも構わないんだろ? 「

「ああ……そうね。じゃあ貴方にしてもくわ」

「はい、笹井さん。こないだいってたスケッチブック。これあげるよ

「え?」

「ほり、書く用紙もつてないっていってたじゃん? これあげる。つもちょこっとかにちやつてるんだけどさ。これにかいてうちに見せてよ、絵」

クラスからの拒絶は、次第に悪化して私はクラスに近寄らなくなつた。

そんな時でも、先輩たちは何も変わらず、接してくれた。

「絶対描いてこいやー？ テスト終つたらみせつこだー！」

そういわれた。 そう渡された。

嬉しかつた。

信用する唯一のあの人になくさん、たくさん、話した。
何を描こう。何を描いたらすごいといつて貰えるだろう。
嫌われないかしら。下手といわれないかしら。

たくさん心配をこぼした。

テストの試験中も、クラスから氣をそらすことが出来た。
なのに。

「・・・・・」

荒らされた家の机。
無くなつた画材と、スケッチブック。
私は走つて、走つて、ゴミ捨て場に行つた。
あるはずが無いのに。
朝、出したにきまつてるのに。

「…お母さん…スケッチブックと画材…シラナイ?」

「捨てたわよ」

「何で?」

「あんた、成績分かつて絵かいてるの? あんな成績とつて置いて絵
?!」

「ありえないわね。ビリでござりつもつよーー!」

くずれ墜ちてゆく。
私は私室に入ると、机に放られて出されていたカッターに手を伸ば
す。

もう、何も、無いんだ。

何も、必要ないんだ。

どこにもいけないんだ。

居場所なんてなかつたんだ。

誰もいなんだ。

助けなんて無いんだ。

助けて欲しかったんじゃないんだ。

救つて欲しかったんじゃないんだ。

誰も振り返らない。

言葉だけが残つてゆく。

私は独りだつたんだね。

涙が零れ落ちた。

もう全部流しきったと思っていたのに。
もう、枯れてしまつたと思っていたのに。

ばさばさと切つた髪。

赤い液体が零れおちる。○
痛い。痛いよ。

「ぐずれちまえ。倒れちまえ。気がすむまで泣いちまえ。
声堪えてても、意味無いだろ。息して吐いちまえ。
もう、お前、いっぱい傷ついたんだから」

彼がいってくれたように。にづく。

私はそのまますっと泣き崩れた。

次の日、ばさばさな髪はクラスでコソコソと囁かれた。

今回つてきた手紙は【不潔！】【汚い！】などの言葉が増えた。

だけれど、何故かこそし心が穏やかになれた。

部活にもクラスにも学校にも、落ち着く場所なんてなかつたのに。

「独りでも構わないんだよ。俺だつて独りだ。

だけど寂しくなっちゃいけないんだ。

寂しいと、本当に独りになつちまつ。

「私は十分だよ。貴方がいるから。

だから生きてるんだ。死んでも良い存在なんだから

「俺の為に生きるな。

俺が此処にいるからじゃない。

お前がそこにいるから俺が此処にいるんだ」

私は次の日学校を休んだ。

母さんには「いきたくない」といった。

正直、休みたかった。休息をとりたかった。

バサバサの髪を鏡で見て、

美容院に行ってみようと思つた。

そういうえばボブショートなんて、小学校中学年以來だ。

あの人にも相談してみた。

「ベリーショートの鶏冠にしてこいよ」と笑われた。

季節は冬の終わりだった。

「いきたくない」といつた言葉で、

母親は成績の事をひどく攻めなくなつた。

ベリーショートの髪型が、

やがて、切欠となつて虐めから解放された。

2年のクラス替えで、私は友人が出来るようになった。
人間不信は…まだ、今でも残りつつあるけれど。

あの人はそれ以来会えなくなってしまった。
いま何処にいるのか、何処で見ててくれているのか。

彼は、誰だったのだろう。

励まさず、けなさず、笑わず、情けをかけず、
それでもずっと傍にいて
ずっと話を聞いてくれた。

一度彼は私に言った、「俺は、抜け殻なんだ」と。
そのときは分からなかつた。
いまでもわかつていないとと思つ。

貴方は貴方であつて、私であつた。
私は私であつて、貴方であつた。

全くの違つ者同士だけれど、
同じ者として近くにいたんだ。

消えてしまった心。
消えてしまった彼。

だけれど残つてる。

私は、貴方にずっと会つていたんだ。

貴方という存在に。

ペンはなぞる。

水色のレター用紙の上を。

窓の外では他のクラスが体育の授業をしている。
今は国語の授業だ。余所見がばれることはない。

最初の一文を私は思いついたように
丁寧に。書き上げた。

DEAR MYSELF（親愛なる貴方へ…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2358b/>

DEAR...

2010年12月4日14時11分発行